

四字熟語・ 成句辞典

竹田 晃

takeda akira



講談社
学術文

四字熟語・成句辞典

常州大学図書館
藏 竹田晃 書 章

講談社学術文庫

竹田 晃 (たけだ あきら)

1930年東京生まれ。東京大学大学院中国語中国文学専門課程修士課程修了。専攻は中国古典小説。東京大学・明海大学名誉教授。主な著書に『中国の幽霊—怪異を語る伝統』『曹操—三国志の奸雄』『三国志の英傑』『中国小説史入門』、訳書に『搜神記』『世説新語』『倭国伝—中国正史に描かれた日本』(共訳)、共編書に『岩波漢語辞典』ほか。



定価はカバーに表示してあります。

よ じ じゆくご せい く じてん
四字熟語・成句辞典

たけだ あきら
竹田 晃

2013年3月11日 第1刷発行

発行者 鈴木 哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395-3512

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

装 幀 蟹江征治

印 刷 大日本印刷株式会社

製 本 株式会社若林製本工場

© Akira Takeda 2013 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。なお、この本についてのお問い合わせは学術図書第一出版部学術文庫宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。[R] (日本複製権センター委託出版物)

ISBN978-4-06-292163-3

目次

はしがき 3

凡例 5

「話す」「書く」ための四字熟語・成句ガイド 7

本文 33

五十音索引 33

出典解説 545

難読語読み方の手引 555

音訓総索引 565

学術文庫版の刊行にあたって 670

四字熟語・成句辞典

竹田 晃

講談社学術文庫

目次

はしがき 3

凡例 5

「話す」「書く」ための四字熟語・成句ガイド 7

本文 33

五十音索引 33

出典解説 545

難読語読み方の手引 555

音訓総索引 565

学術文庫版の刊行にあたって 670

はしがり

即刻退陣・国会運営・緊張関係・政治腐敗・政治改革・変革要求・意識変化・産業構造・金銭感覚……これらは、平成元年七月に行われた参議院選挙直後の、ある新聞の囲み記事の冒頭四十行余りに見られる「四字熟語」である。

中国から伝えられた漢字は、長い年月を経てわれわれ日本人の日常の言語生活の中に完全に定着した。その歴史の中で、漢字を、二字・三字・四字と連結した形で用いるいわゆる「熟語」も、きわめて数多く、そして普遍的に使用こなされてきている。漢字の造語力は大変強く、そして活発であり、文化の発展の中で、新しい概念や物が作られたり外国から輸入されたりすると、ただちにそれに対応する漢語が作られる。例えば、近代中国では、機械文明の発達に応じて、電影（映画）・電視（テレビジョン）・電腦（コンピューター）などの訳語が作られた。このような現象は日本でも同様であり、日本人の鋭い造語感覚によって、さまざまな領域において、また、さまざまな状況の中で多くの熟語が作られている。冒頭に挙げた新聞記事の中の四字熟語のほとんどすべてがその例である。

さて、漢字は一字一字が固有の概念を備えた「語」としての性質をもつものであり、また、一字が一音節によって発音されるという特徴をもっている。しかし、その漢字を用いて、読む・書く・話す・聞くといった言語生活をスムーズに進めるためには、漢字一字一字をバラバラにして用いたのでは不便であり、不安定でもある。したがって、語としての概念を明確にし、また、耳で聞いてわかりやすくするために、漢語の複音節語化、つまり熟語の形成が促進されたのである。漢字の熟語としては、一字のものが圧倒的に多く、次いで多いのがそれを二倍にした四字熟語である。

中国の韻文に見られる最も古いリズムは、四字一句、つまり四言詩である。このことからわかるように、四字句、四音節のリズムは、まとまった概念や、含蓄の深い意味内容を表現する漢語の形式としては、最も単純で、口ずさみやすいものである。ここに、四字熟語が古来好んで用いられてきた最大の理由がある。

本書に収めた四字熟語は、その源を中国の古典に発するものがかなり多く、また、仏教語にもとづくものも見られる。これらの語には、故事を背景にもつもの、成句や格言としての性格を備えているものが多く、わずか漢字四字の中に、古人の豊富な生活体験や人生の知恵がコンパクトに盛り込まれているものであることは言うまでもない。

本書にはまた、漢字・漢語を自国語として完全に消化している現代の日本人の言語生活の中から生まれた四字熟語もかなり収めた。これによって、四字熟語が、けっして難解でカビ臭いことではなく、われわれの日常生活の中になまなましく息づいているものであることを、読者の皆さんに知っていただきたいと考えたからである。

これらの新旧とりまぜた四字熟語が、読者の皆さんの言語感覚を利ぎすまし、時と場合に応じた文章やスピーチなどの内容を豊かにし、それらに彩りを加えるために役立つものとなることを期待する。

本書の執筆について顧みると、終始全面的に協力してくださった東京大学文学修士・台湾大学文学碩士古田島洋介君（比較文学・中国文学専攻）、また、当初から熱心に懇請してくださった講談社の朝倉光男辞典局長、きわめて煩瑣な編集の実務を万事遺漏なく遂行してくださった同社荒巻宣佳担当部長、桂樹社グループの塩沢信司・圓山博宣の各氏のお力がなかったら、おそらくこのような形に完成することはできなかったであろう。記して謝意を表する。

竹田 晃

一九八九年十一月一日

凡例

【本書の特色と使い方】

本書に収録した四字熟語・成句の見出し項目の総数は約四五〇〇語で、類義語・対語・諺などの関連語を含めると総索引項目は七千余になり、これは、類書中、最大の収録項目数である。

内容上の特色として第一に挙げられるものは、ほとんどの項目に、現代人向けの用例をつけたことで、これは意味内容の理解を助けるとともに、誰にでも応用がきくヒントとなっている。また、本書の冒頭に掲げた「話す」「書く」ための四字熟語・成句ガイドは、わたくしたちがスピーチや文章などで何かを表現するのに適切な四字の熟語や成句をさがすときの手がかりとなるもので、冠婚葬祭やビジネスなどのいろいろな場での「話す」「書く」に役立つ言葉がすぐ引き出せるように作ってある。また、総索引を有効に使うことによつて、多くの言葉の有機的なつながりが発見できる。なお、意味の解説をはじめ、すべての記述に平易さを心がけ、実用性をめざした。

【見出し項目】

〈配列〉利用者の便を考慮して五十音順に配列した。ただし、「読み」の部分で(の)(に)(は)など、()でくくられているものに関して

は、()内の読みを無視した配列とした。

〈漢字表記〉原則として一九八一年告示の「常用漢字表」にもとづいたが、必要に応じて表外漢字を用いた。ただし、字体の違い・現代表記の代用字などに関しては、適宜補注欄で扱った。

なお、もともとは三字熟語であるが、わが国では「の」を補って読むことが慣用化している語は、「之」を加えて四字熟語として立項したものもある。

〈読み〉見出し項目の読みは、その下の「」内に示した。音読を原則としたが、訓読が広く一般に通用しているものに関しては、訓読を採用した。ただし、音読で立項したもののうち、訓読することによつて意味が理解されやすいものについては、意味欄の冒頭に訓読を示してある。

【意味】

意味欄では、見出し語の意味を原義を交えてわかりやすく解説した。また、必要に応じて、字義あるいは語釈を施して、意味の助けとなるように配慮した。

【出典】

本書でいう出典とは、四字熟語がそのものの形で初出している書籍・作品、また、その典籍での表現をもとにして四字熟語が造られた場合、もととなった書物などを含めていう。一般的によく知られ

た漢籍などを中心に採用し、故事として挙げられているものには、極力出典名を挙げることに努めた。しかし、出典そのものがあまり一般に知られていないものについては省略した。

なお、漢籍の引用文は書き下し文で示し、詩や評論名などの題名は王朝名・作者名を示すとともに、原文を尊重して白文で示した。

【用例】

スピーチや会話、手紙・日記・レポート・エッセイなどの文章にすぐ応用がきくような【用例】を掲げた。また、現代人の用例とはなりにくいが、教養上の参考として、日本古典の中で使われている例を典故を示して採用した。

用例中の見出し語相当語は、音読・訓読いずれの場合もゴチック体にして目立つようにした。ただし、活用のあるものに関しては、活用語尾までをその対象とした。

【補注】

【補注】欄では特に語法上の注意、見出し語漢字の別表記・別の読み方、表記の誤用例などを中心に、日本語と漢語の意味のずれ、語源的な説明など【意味】【出典】では扱いにくい知識を補った。

【関連語】（【類語】【対語】）

項目の最後には適宜【類語】【対語】として関連する語を挙げた。四字

熟語のみならず、三字熟語・成句・諺の類も多く採用し、言葉の意味の広がりや関連が感じとられるようにした。【類語】には、厳密な意味での同義語・類義語に限らず、その語に関連のある語、その語から連想される語をも含め、【対語】には、反意語に限らず対応関係をもつ語などをも含め、ともに意味の範囲をかなり広げて採録した。なお、関連語として挙げた語が見出し項目として立項されているものは、その語をゴチック体にして、関連語どうしの相互参照の便をはかった。また、見出し項目が訓読のものは、その形で示した。

【出典解説】

巻末に「出典解説」を設け、本文の【出典】に挙げた漢籍のうち主要なものに簡単な解説を付した。

【索引】

本書の利用の便のため、次の二つの索引を巻末に設けた。

(一) 音訓総索引 本文の見出し語、ならびに関連語として挙げたものを、三字熟語・諺・成句類を含めて、五十音順に配列した。

なお、見出し語として立項されているものはゴチック体で、関連語などとして挙げた語は明朝体で示した。

(二) 難読語読み方の手引 見出し語として挙げた項目が難読と思われるものを特に選び、その一字目の総画数順によって配列した。

「話す」「書く」ための

四字熟語・成句ガイド

各種のスピーチや手紙・文章などで何かを表現するのに適切な四字熟語・成句を本文中の見出し語から抜粋し、ここに収録した。特に、冠婚葬祭やビジネスの場で役に立つことを考え、人事に関するさまざまな状況を広い意味でとらえて分類し、すぐ応用できるように簡単な意味を添えてある。表現力を豊かにするために大いに活用していただければ幸いである。

■感情の表現

●喜び

歡天喜地〔かんてんきち〕天をあおいで^{よろこ}び、地にうつむいて喜ぶ。非常に喜ぶさま。

欣喜雀躍〔きんきじゃくやく〕雀がはねるように、大喜びして小躍りすること。狂喜乱舞。手舞足踏^{しめあそび}。

有頂天外〔うちょうてんがい〕有頂天に登りつめる意から、大喜びして無我夢中になる。

喜色満面〔きしよくまんめん〕うれしそうな表情が顔いっぱい表れていること。

揚眉吐氣〔ようびとき〕思いどおりに事がかない、抑圧されていた気持ちから解放されて、喜び楽しむさま。

大快人心〔たいかいじんしん〕悪人・悪事がこらしめられるなど、人々をきわめて痛快な気持ちにさせるさま。

●悲しみ

断腸之思〔だんちようのおもひ〕はらわたがちぎれるほど悲痛な気持ち。九腸寸断^{きゅうちゆうすんだん}。

哀毀骨立〔あいきこつりつ〕人の死に遭って、悲しみのあまり、やせ衰えるさま。

愛別離苦 「あいべつりく」 家族・夫婦など愛する人と生別・死別する苦しみ。

風樹之嘆 「ふうじゆのたん」 父母が亡くなったために孝行を尽くすことのできない嘆き。

飲泣吞声 「なみだをのんでこゑをのむ」 あえて悲しみや怨み（うらみ）をがまんして、表に現さないようにする。

声涙俱下 「せいるいともにくだる」 悲しみや憤りで感情が高ぶり、話しながら泣くこと。

● 怒り・憎しみ

張眉怒目 「ちやうびどもく」 眉をつり上げて目をむく。荒々しい形相をいう。

目眦尽裂 「もくしことごとくさく」 左右の目尻（めじり）が裂ける。激しく怒り、両目を見開いてにらみつけるさま。

柳眉倒豎 「りゆうびとうじゆ」 女性が怒って眉を逆立てるさま。

怒髮衝天 「どはつしようてん」 毛髪が逆立つほどに激しく怒るさま。頭髮（とうはつ）上指（うさし）。

忍氣吞声 「にんきどんせい」 怒りをこらえて、声を出さない。憤り（いきどお）をおさえ、言いたいことをあえて言わずにいること。

怒入骨髓 「うらみこつすいにいる」 怨み（うらみ）が骨髓（こつすい）にしみ通るほどに激しいこと。

食肉寝皮 「しよくにくしんぴ」 相手の肉を食べ、皮をはいてその上で寝る意から、憎しみがはなはだしいこと。

疾惡如讐 「しつあくあだのごとし」 まるでかたきであるかのように悪人や悪事をにくむこと。

切齒扼腕 「せつしやくわん」 歯をきしりし、腕をぎゅつとつかむ。非常にくやしがるさま。偏袒扼腕（へんたん）。

● 驚き・恐れ・恥ずかしさ

大驚失色 「たいきしよくしよく」 非常に驚き恐れ、顔色が青ざめること。

瞠目結舌 「どうもくけつぜつ」 目を見開き、舌がこわばって言葉が出ないように、ひどく驚くさま。

胆戰心驚 「たんせんしんきよう」 驚きや恐怖のあまり、胸がおののきふるえること。

影駭響震 「えいがいききようしん」 影を見ただけで驚き恐れ、音を聞いただけで震えあがることから、ひどく驚き恐れること。

失魂落魄 「しつこんらくはく」 精神が不安定で常軌（じょうき）を逸（いつ）するさま。大いに驚き、あわてふためくさま。魂飛魄散（こんひはくさん）。

聞風喪胆 「ぶんふうそうたん」 自分についての風評や、他人に関する悪いうわさなどを聞いて非常にびっくりするところ。

使穴可入 「あなをしてゐるべからしむ」 恥ずかしくてたまらない。穴があつたら入りたい。

冷汗三斗 「れいかんさんとう」 冷汗（ひあせ）や汗が三斗も出るように、非常に恐ろしいめにあつたり、恥ずかしい思いをしたりするさま。

● 焦り・不安

顔厚忸怩〔がんこうじくじ〕 恥知らずな者が、さすがに恥ずかしくきまりわるい思いをすること。

周章狼狽〔しゅうしょうろうばい〕 思いがけない事態にぶつかって、あわてふためくこと。

心慌意乱〔しんこういらん〕 あせつてあわてふためき、何が何だかわからなくなってしまうさま。心乱麻の如し。

手足無措〔しゆそくおくところなし〕 不安であわてふためき、どうしたらよいかわからない。措く所を知らず。

疾言遽色〔しつげんきょしよく〕 早口でしゃべり、あわてた顔つきをするように、落ちつきのないさま。

心急如火〔しんきゅうひのごとし〕 火がついたかのように、気持ちがじりじりとあせる。きわめて気がせくさま。

杯中蛇影〔はいちゅう(の)だえい〕 物事を気にして疑い深くなり、ありもしないことにおびえて自分で苦しむ。吳牛喘月。

風声鶴唳〔ふうせいかくれい〕 風の音と鶴の鳴き声。ちよつとした物音にも敵が来たかとおじけづくことのたとえ。草木皆兵。

如坐針氈〔しんせんにざするがごとし〕 気持ちが落ちつかない。不安で居ても立ってもいられないさま。

愁眉不展〔しゅうびひらかず〕 眉のあたりに愁いがいつまでもこめられている。心配がいつまでも続くこと。

群疑滿腹〔ぐんぎまんぷく〕 もろもろの疑いで心がいっぱいになること。

● 嘆き

脾肉之嘆〔ひにくのたん〕 才能・手腕などを發揮する機会に恵まれないのを悲しむこと。

鳳凰在笯〔ほうおうざいど〕 鳥籠にとじこめられている鳳凰のように、賢人が地位に恵まれず、民間にうもれていることのたとえ。

悲歌慷慨〔ひかこうがい〕 社会の不正や乱れ、また自分の不運を憤って嘆くこと。悲憤慷慨。

積薪之嘆〔せきしんのたん〕 新来の者が重く用いられ、以前からいる者が下積みの苦勞を続ける悩み。

牛驥同皁〔ぎゅうきどうそう〕 足の遅い牛と一日に千里も走る駿馬が同じかいはを食べる。賢人が愚人と同じ待遇を受けること。

驥服塩車〔きふくえんしゃ〕 才能のすぐれた者がつまらぬ仕事に従事させられているたとえ。

残杯冷炙〔ざんぱいれいしや〕 待遇や扱いで辱めを受ける。

形影相弔〔けいえいあいとむらう〕 孤独で、頼るべき親戚や友人がいないこと。

孤立無援〔こりつむえん〕 ひとりぼっちで、周囲からの助けが得られないこと。

孤影悄然〔こえいしょうぜん〕 ひとりぼっちで、しょんぼりとしているさま。

道傍苦李「どうぼう(の)くり」道ばたに実っている苦い李。人に見捨てられ、顧みられないもののたとえ。

遲暮之嘆「ちはのたん」だんだんと老年になっていくわが身を嘆くこと。

失意

垂頭喪氣「すいとうそうき」失敗したり失望したりして、しよげかえり、がっかりしているさま。灰心喪氣。

喪家之狗「そうかのく」おちぶれてしよんぼりしている者のたとえ。

秋風索寞「しゅうふうさくばく」勢いを失い、おちぶれてさびしげなさま。

萎靡沈滞「いびちんたい」物事に活気がなくなり、進展の勢いがなくなること。

声名狼藉「せいめいろうせき」名誉を失って回復したいこと。評判が地に落ちること。

一敗塗地「いっばいとち」再起不能なほどに完敗する。

弓折矢尽「ゆみおれやつく」弓が折れ、矢も使い果たしてしまふ。万策尽きて、なすすべがない状態。刀折れ矢尽く。

迷い・困惑

五里霧中「ごりむちゅう」物事の手がかりがなく、方針や手段を定めがたく迷うこと。

暗中摸索「あんちゅうもさく」手がかりがないまま、あてもなくさぐり求めること。

多岐亡羊「たきぼうよう」方針や進路がいろいろあって、どうしてよいか選択に迷うこと。

思案投首「しあんたけくび」あれこれ考えあぐねて困っているさま。

閉口頓首「へいこうとんしゅ」困りきって措置のしようがない。また、やつつけられて返答につまること。

大惑不解「たいわくふかい」大いに惑って、いつまでも疑問が解けないこと。腑に落ちない心境。

拳棋不定「きょきふてい」囲碁の基石をつまみあげたもののどう打つべきか決まらない。決心がつかずためらってぐずぐずすること。

日暮途窮「ひくれてみちきわまる」日が落ちて暗くなつたうえに、道がゆきづまる。万策尽きて途方にくれること。

窮途末路「きゅうとまつろ」もはやどうにもものがれようがなく、追いつめられて困りはてているさま。

進退維谷「しんたいこれきわまる」進むことも退くこともできず、困りはててしまふ。進退兩難。

満足・順境

順風満帆「じゅんぷうまんぱん」物事が好都合に調子よく運ぶさま。

動罔不吉 「うごきてまちならざるはなし」 することなすことがすべて順調に進む。

心滿意足 「しんまんいそく」 非常に満ち足りた気分になること。

三平二満 「さんぺいじまん」 めぐまれない境遇でも、心やすらかに過ごす。足るを知って、落ちついていゑるさま。

活潑潑地 「かつぱつはつち」 とびはねる魚のように、勢いがよく、元氣盛んで心配事などのない様子。

雨過天晴 「うかてんせい」 雨がやんで、空が晴れわたる。好ましくない状況が好転すること。

重見天日 「ちようけんてんじつ」 苦しく暗い環境をくぐり抜け、再び明るさをとりもどすこと。

生竜活虎 「せいりゆうかつこ」 いきいきとした竜や虎のように、元氣はつらつとしたさま。

人間関係

友情

管鮑之交 「かんぼうのまじわり」 春秋時代の管仲（かん・ちゆう）と鮑叔牙（ほう・しゆくが）の親交から、友人どうしの厚い親交。

金蘭之契 「きんらんのかい」 金属よりも堅く、蘭の花よりもかくわしい結びつき。友人どうしのきわめて親密な交際。

爾汝之交 「じじょのこう」 互いに「おまえ」「きさま」と呼び合えるような、きわめて親しい交際。

心腹之交 「しんぷくのとも」 互いに心をうちあけることのできる最も親しい友人。

水魚之交 「すいきよのこう」 魚と水の関係のように、互いに離れることができない親密な交際。

耐久之朋 「たいきゆうのとも」 いつまでも変わらぬ友情で結ばれた友。

断金之交 「だんきんのこう」 金属をも断ち切るほどに固い交わり。友情のきわめて強いこと。

莫逆之友 「ばくぎやくのとも」 逆らうことがない友。気が合ってきわめて親しい間柄の友人。

刎頸之交 「ふんけいのこう」 生死を共にし、相手のために首を切られても後悔しないほど心を許し合った交際。

膠漆之交 「こうしつのこう」 にかわや漆は固まるときわめて堅くなるように、友情のきわめて厚いこと。

肝胆相照 「かんたんあいてらす」 友人どうしが互いに心の奥底まで理解している、きわめて親しい関係。

氷炭相愛 「ひようたんそうあい」 友人どうしが互いに戒め合い、特性を生かして助け合うこと。

傾蓋如故 「けいがいこのごとし」 偶然に出会っただけなのに、まるで古くからの友人のように、うちとけて親しみ合う。

● つき合い

万古長青 「ばんこちようせい」 松の葉の青い色がいつまでもあせないように、友情などが、いつまでも変わらないこと。

竹馬之友 「ちくばのとも」 幼いとき、いつしよに竹馬に乗って遊んだ友。幼いころからの親しい友人。

杵臼之交 「しきゆうのこう」 身分の違いをこえた、身分にこだわらない交際。

布衣之交 「ふいのこう」 身分・地位・貧富の差などの違いに関係なくつき合うこと。欲得ぬきの交際。

芝蘭之交 「しらんのこう」 君子または善人どうしのうるわしい交際。

雲霞之交 「うんかのこう」 俗世間を超越した交友。

勢利之交 「せいりのこう」 権勢や利益を得ることを目的とした交際。

市道之交 「しどうのこう」 損得利害の関係だけのつき合い。商売上の結びつき。

水随方円 「すいずいほうえん」 水が四角い器にも丸い器にもすなおにおさまるように、人の善悪は交わる友の善悪によって決まる。

近朱必赤 「しゆにちかづけばかならずあかし」 人は友人の善悪によって感化される。朱に交われば赤くなる。

墨子泣糸 「ぼくしきゆうし」 人間は環境や習慣、また他人からの影響によって、善人にも悪人にもなる。

蘭芷漸漓 「らんししゅうにひたす」 すぐれた素質の人物でも、悪い環境にいるつまらぬ者と交際すれば悪に染まってしまふ。

唇齒輔車 「しんしほしや」 唇と歯、頬骨と下あごの骨のように、もちつもたれつの関係。

蛇蚺蝟翼 「だふちようよく」 世の中はもちつもたれつの関係にあること。

不即不離 「ふそくふり」 つきも離れもしない関係を保つこと。つかずはなれず。

寸步不離 「すんぽふり」 関係が密接で、かたときも離れずいつしよにいる。

片利共生 「へんりききょうせい」 一方だけが利益を受け、他方は何らの利害も生じないような人間関係。

● 兄弟

鵲鵲在原 「せきれいげんにあり」 兄弟が危難に際して互いに助け合うこと。

棣鄂之情 「ていがくのじよう」 兄弟の美しい情愛。にわうめの花「棣鄂」はいくつも集まって美しく咲くところから。

手足之愛 「しゆそくのあい」 兄弟の間の情愛。本人を胴体に、兄弟をその手足にたとえる。

夜雨对牀 「やうたいしやう」 夜、雨音を聞きながら兄弟が寝台を並べて仲良く寝るところから、兄弟が互いに思い合う心情。

● 親の愛

倚門之望「いもんのはう」子供の帰りを待ちわびる母の情。

舐犢之愛「しとくのあい」親牛が子牛を舐めて愛することから、親が子を愛する気持ち。親の過保護。

掌上明珠「しょうじょうのめいしゆ」きわめてたいせつにされている人、特に父母にこのうえなくかわいがられている子供（娘）をいう。

掌中之珠「しょうちゅうのたま」手のひらの中に握りしめているたいせつな真珠。たいせつなもの、最愛の妻や子供のこと。

父為子隱「ちちはこのためにかくす」父親は自分の子の悪事や欠点を隠してやる。父としての自然な人情をいう。

● 子の愛「孝行」

反哺之孝「はんぼのこう」養い育ててくれた親の恩に報いるように孝行をすること。

烏鳥私情「うちよう（の）しじよう」子が親を養おうとする情。

三枝之礼「さんしのれい」鳩は親より三本下の枝にとまって親に対する礼儀を守ることから、親孝行の意。

温清定省「おんせいしていせい」親の面倒をよくみること。親に孝養を尽くすこと。

三釜之養「さんぶのよう」薄給の身で親孝行すること。

菽水之飲「しゆくすいのかん」貧しい生活の中で親に孝養を尽くすのがほんとうの孝行である、という孔子の語。

扇枕温衾「せんちんおんきん」親に孝養を尽くすこと。夏は、枕もとで扇をあおぎ、冬は、ふとんを暖めてから親を寝かせる。

養志之孝「ようしのこう」親の意向を察して、その気持ちを満足させるような孝行。

遊必有方「あそぶにかならずほうあり」孝行の一つ。行く先をはつきりさせて父母を安心させる。

劳而不怨「ろうしてうらまず」親に不本意な用事をさせられても怨みに思わない孝行の態度。

寸草春暉「すんそうしゆんき」父母の恩には、子供はその万分の一にも報いがたいというたとえ。

■ 祝う

● 結婚

合縁奇縁「あいえんきえん」人と人との結びつきは不思議な因縁による。男女のほか、夫婦・友人などのめぐり合わせについていう。

偕老同穴「かいろうどうけつ」夫婦の愛情が非常に強く、ともに老い、死んでは同じ墓穴に葬られること。